入江來布主宰俳誌

梅花

昭和二十六年五月十五日第三種郵物認可
昭和二十六年六月十五日發行（毎月一回十五日發行）

二六年七月

第十四號

燦たり
五十年の傳統と信用
大阪市北区源藏町二十七番地
株式會社 西尾倉庫
電話 堀川(35)二一六一二番 二六八七番
伊勢町出張所 大阪市北区伊勢町二十八番地
電話 堀川(35)四九五六番
旅籠町出張所 大阪市北区旅籠町三十四番地

梅花　第十四号

国破山河在……田中　克巳　6
漱石くさぐさ……鍋平　朝臣　8
雲崗石佛……入江　來布　16
黒田さんと俳句……福井　艸公　22
紺飛白……得田　繁　20
青々の俳句論……入江　伸　24
互評二会……32
近作……1・2・20
連作……14
梅花壇……36
千層句碑建つ……22
マチス展を見る……35
西宮俳句協会……48
菖蒲の興福院……48

初夏の美裳
呉服・染物・袋物
小大丸
南区心齋橋筋二丁目
電話南七四九六番

芳林窯
芳樹軒
一汁三菜の美味御清餐
書画御自作の即席陶藝
簞瓢庵
西宮市甲陽園
電話西宮一〇三番
一八〇一番

本舗・心齋橋
梅田・専門大店
東京・銀座舗
扇速浪
堂壽保
舗扇田保久　みのや

和紙・書翰箋
便箋・封筒・巻紙
千代紙・祝儀袋
色紙短冊・和本類
並に
風流御すり物
調進致します
もみぢや
今井商舗
大阪驛専門大店

入江來布

屋気楼画と放浪の船に乗る

みかさ山五月の晴にちかよりぬ

苗代田や月が來てゐる畦木瓜へ

更衣いしぶみの前に立ちつくす

更衣日かげぐんぐん夕に未だし

ぎしぎしの穂のいろおなじ更衣

単衣の身月は千々なる麦の波

老鍛冶屋とんとんうてり蝸牛

毛虫絶えたりうれしや雲雀啼てゐる

脚のところの水の凹みや水馬

余花のすぐうしろの夜のとばりかな

葉櫻や水を隔てときを隔てたる

國破山河在

田中克己

元祿七年十月。芭蕉が大阪の花屋でなくなつたとき、枕頭にのこされた書の中には、杜甫はなく、古今集と百人一首とのみが詩歌の書であつたらしい。しかし芭蕉が杜甫を愛したことには、疑ひがない。とりわけ「奥の細道」に見えてゐる平泉の金色堂の感懷には、杜甫の国破山河在、城春草木深の二行を引いてゐるから、この旅行では杜甫詩集を携へたことと思はれる。

芭蕉の感懷は三代の栄華は金色堂の建物がしめすだけで、とぶらふひともない平泉でこの詩を思ひ出したことと相伴つて、当を得たものといはねばならないが、さて杜甫の句はいついかなる時に作られたのであらうか。

芭蕉はともあれ、われわれとしてはいま一度ふりかへつて考へてみてもいいのではあるまいか。ふしぎにも芭蕉が奥州に旅行したのはその四十六歳の時であつたが、杜甫がこの詩を作つたのは同じくその四十六歳だつた時のことである。国が破れる原因となつた安祿山の叛乱はこれに先だつその四十四歳の年、天宝十四載（七五五）の末であつた。杜甫はこの乱の勃発したときには家族のゐた奉先縣に行つてゐた。やつと得た官位が気に入らなかつたか、都の長安を出で、そこに赴いた時の様子は五百字に上る「詠懷」といふ詩に示されてゐて、門に入ると号泣の声がきこえ、これが幼児が餓死したための泣声だつたとうたつてゐる。この貧の悲しみに加へて国の乱れを聞いた時の詩人の気持はどうであつたらうか。ただでさへ生活に苦しんだ詩人の生活は乱のためにいよいよ苦しくなつた。翌年には家族とともに二回、居場所をかへ、やつとその安全を期し得たのであらう。自らはこれと別れて、行在にゐます天子のもとへ赴かうとして、賊軍に捕へられ、いまは敵の根據地となつてゐる長安の都に護送された。

かくて、再び見ざるを得なくされた長安はもとの花の都ではない。皇族のものさへ路傍に泣くありさま、東から來た駱駝が都大路に一杯になつてゐた。この有様は同じく傑作である「哀王孫」が如実に描き出してゐる。都をとりかへさうと遣はされた官軍は賊軍に敗れた。かくて杜甫は四十六歳の元日を迎へ、寒食をすごし、妻子や妹の事をおもつて捕虜の身をなげいた。この乱の今一つの原因であつた楊貴妃の事を思ひ出しては「哀江頭」を作つた。国破山河在の詩はこれと同じ春の作である。

国破れて山河あり
城春にして草木深し。
時に感じ花に涙をそそぎ
別れを恨みて鳥に心を驚かす。
烽火つらなること三月
家書は万金にいたる。
白頭掻けばさらに短く
すべて簪するにたへざらんとす

「春望」の詩を全部錄すると以上のごとくである。はじめの一句は詩人三好達治氏の説によれば「国破れて山河のみあり」と読むべきだといふのだが、よみはともかく、意はその通りであらう。芭蕉には妻子はなかつたやうである、従つて笈を負うての旅行は西行と同じくかへつて楽しかつたかもしれない。のみしらみや馬の尿すらも句となつてゐるから快適でなくても、問題ではなかつたかもしれない。

杜甫はさうでなかつた。芭蕉が見た破れた国は陸奥藤原氏である。その破れたのはむかしのことである。杜甫の破れた国は現実のおのれの国であつて、しかも杜甫は愛国者としては文学史家すべての認めるところである。この破れた国がいつもとのやうになるかは、当時は見込みさへもつかなかつたのである。しかも自らは囚人としての待遇を受けてゐる詩人の心中は察するにもあまるものであつたらう。この現実の亡国の恨みを切々とうたつた詩が、太平の逸民、芭蕉に深い共感をよびおこした理由は何だらうか。わたしにはふしぎでならない。

（筆者　帝塚山短期大学教授）

PURE SOCIETY

文化教室　ピュア・ソサイエティ
名誉会長ジャコブ・デシイエザー
会員募集
（入学隨時・晝夜間共）

目科
英語科・英文タイプ科
速記科・服飾科・割烹
茶道華道科・幼童バレー

学校法人　西宮学園
西宮市御茶家所町五五
国道夙川電停西二丁北
理事長　福井治兵衛
電話三五・一五九九番

西宮俳句協會
春季大會

五月二十日
於 苦楽園京風莊

西宮市の主唱で各派聯合の本協会が結成されて第二回の大会。市長賞や会長賞等、賞品十数点、会者七十余名、女流十数名も交り盛会であつた。会長は倦鳥の先輩福井艸公氏である。

海見ゆる山住居にて夏に入る　艸公
母の顔兒は知りそめし幟かな　芦村
庭石に山のしめりや夏木立　八重子
更衣女は小さき幸に足る　英子
青芝に若さみなぎる足伸ばし　茂二
山独活や山窩と知れど目のすずし　流生
貴船の午静かに藤の散りつづく　北童
伸びるだけ伸びてふまれぬ夏わらび　七葉
遊ぶ子の一人づつ減り蚊喰鳥　草月
萩若葉静かに雨の至らんと　眉山
釣釜の湯加減もよし庭若葉　松魚
皮かたくつけて伸びけり今年竹　翠西
竹落葉谷へ下るに深まりぬ　千草
緑陰に吾子何をしてでも遊ぶ　涼甫
菖若葉石ある形くづさずに　蟻性
手入れよき芝ためらかに庭薄暑　玉祥
松の芯見下す庭や山の冷え　甲子
竹の皮ぬぐ山の香に肌冷ゆる　紘子
万緑の曇りが海をはるかにす　呂閑
残鶯のしきりに鳴ける野点の茶　琢珊
伸びきつて若竹朝の日を吸へる　笠州
岡の上の堀立小屋や鯉幟　花鳥
セルを着てふんぱり椅子により給ふ　微笑子
ロすすぐ筧の水や若楓　普刀
万緑の中に落つく麥の秋　くり子
麥笛を吹いても吾は都会の子　鶏明
衣更してより妻の水々し　秋霞
青き枇杷青きままにて五月去る　羊村
京風莊雲につづきて菖蒲葺く　愚性
若葉道矢印行けば句会場　汗子
輪に吹きし紫煙消えゆく若葉窓　立夏
たわむれの手のはずみたるセルの肩　紀陽女
選挙終りつつじの山の静か哉　喜代蔵
木もれ月の午とはなつて著我の花　けい

〔協会報〕

菖蒲の興福院

五月二十日・於 奈良興福院
薄暑なる水に影してあやめ艸　上野紫亭
青菖の狂乱の幹を羽はたかむ　武藤東子
若葉曇りに長閑堂をさし覗く　鍛永皓平
衣更えて赤い煉瓦の塀がある　里見宜愁
更衣われにたつきを知らしめず　谷疎叩
若葉風魚板に蝕れて見たくなる　岸竹川
古びたる歌碑にあやめのふれいたる　中西一睡
麥の穂のしづかな音に歩みけり　吉田清風
麥秋の子等と別るる水車あり　坂本湖水
尺りきてあやめの紫紺瞳に強し　磯野莞人
拭込んだ廊下にうつる若葉かな　岩佐民女
興福院太蔺静かにゆれる庭　清水晋江
蔺の立ちてあやめ静かに興福院　山田淳男
更衣その瞬間に知る命　富田子絹
勃々の青葉突破る塔修理　朝田淡水
寺の塀曲りて盡きぬ柿若葉　中田豊人
むつとむせる胸にて若葉燃え立てり　依田松韻
刈込みのつつじ若葉が眼を射しぬ　桑山丘子
苗代の区劃正しきそよぎかな　山際みき
石畳蟻と歩みて初夏の寺　小山みどり
更衣里は整の生るるを　入江ゆき
訣れ住むあやめの花のそよぎも見せず　入江　伸
蔺の線にうつつとなりし花あやめ　入江來布
雲に陽光る塔にあやめに曇りつつ

作品募集

梅花壇　十句
当季雑詠
（二百字詰菊版原稿紙使用の事）
用紙は是非所定の大きさのものを御使用下さい

連作
野心作をどしどし御投句下さい。一連十句と云ふ従來の制限は廃しましたから、のびのびとお作り下さい。

別吟句　三句
八月号は、特に兼題を出さず、夏の感を謳つた野心作、自信作三句を別吟欄として御投句下さい。七月号応募作は八月号と合併して発表します。
九月号「海」
三種共
八月號は　六月二十日締切
九月號は　七月二十日締切

七月の句会

青葉忌（行者忌）句會
日時　七月一日（日）正午
場所　箕面・滝安寺
兼題　青葉　五句
役行者小角は大宝元年六月七日昇天千二百五十年に当る

梅花社例句会
日時　七月八日（日）一時
場所　大阪市北浜二丁目交叉点
西ノ辻南西角
淀屋橋電停二筋東辻角
損害保険協会
電話北浜㉓一三八七番
兼題　爪切草・日陰
当季雑吟
各三句

「梅花」七月号
一部（本号）六十圓　〒三円
半年分　三百六十円（送料共）
一年分　七百二十円（〃）
昭和二十六年六月十日印刷
昭和二十六年六月十五日発行
編集発行所　梅花社
大阪市住吉區内
帝塚山東三丁目五
振替大阪三〇〇三番
発行人　入江隼布
堺市北向陽町二丁六四
印刷所　双輪印刷株式会社

色紙短冊
書画材料
精撰顔料
文房珍玩
印石印泥
名香法帖
大阪戎橋
丹青堂
電話南七二一番